

# 宇治茶の伝説と史実

はしもと もとこ  
橋本 素子

## 論文要旨

本稿は、栄西が宋から持ち帰った茶実を明恵に渡しそれを梅尾に植えたとする「深瀬三本木」、明恵が宇治の里人たちに茶実の蒔き方を教えたとする「駒蹄影」、足利義満が宇治に制定したとする「宇治七名園」、これら三つの宇治茶の創業伝説について、成立過程等を検証し、伝説成立の背景について考察したものである。

「深瀬三本木」は、南北朝期の「闘茶」の大流行を背景に登場する。闘茶の遊び方には「本非茶」があり、梅尾茶は栄西が宋から持ち帰った茶実を明恵が梅尾に蒔いたものであるため本茶とされていた。これは闘茶の流行と定着化により、本茶である梅尾茶に対してより根源的な由緒が求められ、事跡を栄西と明恵に仮託することで成立したものと見られる。

「宇治七名園」は、戦国期にはじめて揃って登場する。中世後期の広義の「宇治」には五ヶ庄のほか宇治郷、白川、一ノ坂等の宇治茶生産の拠点となる場所があった。戦国期になると、のちに徳川將軍家の御用をつとめる宇治茶師たちが、宇治郷の新町通沿いに集住し始め、近世にはここが政治・産業の中心になって行く。この過程において、中世茶業者に対抗できる宇治郷や宇治茶師独自の由緒が求められたこと、また「茶の湯」では宇治茶師が作る宇治茶のみが使用されたことにより成立したものと見られる。

「駒蹄影」は、戦国期までに宇治茶は梅尾から宇治へ分植されたものであるとの話が説かれるようになっていたが、宇治郷が「宇治七名園」を持つようになったことに対抗し、五ヶ庄でも江戸時代前期までに分植の事跡を明恵に仮託させた「駒蹄影」を成立させたものと見られる。

これら三つの伝説は、登場する時代も理由も異なるが、幕末に宇治茶が海外へ輸出される段に至り、時系列順に並べて一本化されて語られるようになる。そして今日に至るまで、「宇治茶」のブランド力を高めるものとして茶業の現場で使用され続けているのである。